

「グリーン・ツーリズムにおける行政の役割と地域活性化」

国際学部国際社会学科

3年佐藤利津

1. グリーン・ツーリズムから地域活性を考える

私の地元である A 町 B 地区では、4 年前の 2008 年からグリーン・ツーリズムを開始した。初めはこのような場所に人は来るのかという疑問と共に、自分が生まれ育った地を軽視しているところがあった。しかし、大学生になりサークルなどで体験農業をやる学生や栃木に農業をやりに来る学生の存在を知り、そのようなことの需要があることを実感した。したがって、地元にももっと人を呼び込むことができる魅力があるのではないかと改めて認識した。8 年前に小学校が廃校になってから、それに伴い学校行事で集まっていた地域の人々が交流することもなくなり、地域の活気は衰えていることを感じていた。

グリーン・ツーリズムが始まったことにより、年間を通して行事ができ交流を図ることができ、地元以外の方との交流ができる。少しでも活気や地域住民の楽しみを生むことができれば良いと思っていた。

この事業における行政、主に町の取り組みについては何も把握していなかった。どのようなことが町の役割なのか、地域の発展のために何をしているのかについて知りたいと思い、このテーマを設定した。

本文は、まずグリーン・ツーリズムと B 地区での取り組みについて述べる。そのあとに、問題点をいくつか挙げ、町の役割・訪問調査で私自身が感じたことを基にグリーン・ツーリズムの地域活性化について、今後の展開・提案をする構成としている。

2. グリーン・ツーリズムとは

グリーン・ツーリズムとは、農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動である。欧州では、農村に滞在しバカンスを過ごすという余暇の過ごし方が普及している。英国ではルーラル・ツーリズム、グリーン・ツーリズム、フランスではツーリズム・ベール（緑の旅）と呼ばれている¹。

具体的には、いも掘り、そば打ち、伝統工芸の体験（わら工芸など）、郷土料理の賞味、農家民宿での宿泊などがある。参加者に実際に体験してもらうことを企画の内容に取り込まれている。農山村の活性化を目的として行われている。

B 地区では、棚田での米作り体験、山菜とり、ジャガイモ掘り、そば蒺きなどの季節の田

¹ 農林水産省/「グリーン・ツーリズム」とは（2012年7月現在）
http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/k_gt/index.html

舎体験が企画されている²。

3.実施のきっかけ

大学の教授からの提案で始まった。2012年4月における教授への聞き取り調査では、B地区には地元の観音様を祭る伝統的なまつりがあること、棚田のあるよい景観があることが提案のポイントだったと言う。町そして地区での説明会を経て実現したそうだ。

初年度のグリーン・ツーリズムでは、開催ごとに参加者を募っていた。宣伝に関しては県内のみで、近場の参加者が3,4組来ていた。その翌年から棚田オーナー制度を開始した。D新聞社により棚田オーナー募集の記事を掲載したことにより首都圏の参加者を取り込むことができた³。

募集は10組（各組5名を上限）とし、年会費30000円（30kgの玄米つき）で行っている。Bグリーン・ツーリズム推進協議会が中心となり、婦人会、青年クラブ、老人クラブが会員となって実施にあたっている⁴。

4. B地区における持続可能性と現実性の問題について

現在運営にあたり地区で抱えている問題点がある。それは、地域住民の高齢化ということだ。高齢化率が50パーセントを超えており地区全体で運営をしており、全体的な高齢化を迎えている。したがって主体となっている運営側も高齢であり運営の継続が難しいと感じている。

また、当日の食事については婦人会の方が中心となり食事を作っている。企画はBグリーン・ツーリズム推進協議会が中心に行われているが、実際の作業はその他の会員が行っているため若干の負担が生じているよううかがえる。参加型といえども、もてなす気持ち強いのが現実であり、ホストとしての気質が強いと感じる。

これは私の視点であるが、アドバイザーとして大学教授が企画に加わっているが、よそ者として新たな考えを提案してくれてはいるが、少しホスト側としては大きな負担となるかもしれない企画を盛り込んだりしており現実性から少し離れていると考える。地域の環境と地域住民に根差した事業実施計画が必要と考える。

² 東北農政局（2012年7月現在）

http://www.maff.go.jp/tohoku/stinfo/zirei/23gt/09/23hu1002_01.html

³ 2012年4月における教授への聞き取り調査より

⁴ 会津まちづくり（2012年7月現在）

<http://www.aizu-mirai.com/images/machi/logo.gif>

またリピーターや新たな参加者が加わるが受け入れには上限があることなど、これらの4点が挙げられる。

5. 行政の役割

町は後援として、地域活性化のための補助金を県からもらうための申請やPR、常時連絡が取れるため連絡先の宛てになっている。

実際にA町のグリーン・ツーリズム担当の方へメールでの質問調査を行った。A町とB地区はグリーン・ツーリズムの展開において農村部における伝統、文化などへの理解、そして住民との交流が促進され、とても良い雰囲気の中で事業が行われているとのことであった。また、グリーン・ツーリズムの参加者の中には町の事業に参加する方もおり、コミュニティの最小単位である地区（地域）が輝いていけば、町の活性化にもつながってくるものと考えているようであった。問題点は特にないとお答えいただいた。しかし、前述した通り、人口減少、少子高齢化などにより地域での担い手が減少していくことを心配していた。町民が協力・分担していく中で取り組める体制が必要であるとの考えであった。町としては、地区が自立して活動しているため当面は問題ないとお答えいただいた⁵。

町の役割というのはあまり、感じられなかった。しかし運営していく上での経費の助成金の申請や掲載される連絡先になるなど利点になる部分は大いにある。B地区で行っているこのプロジェクトが町に利益をもたらすような構造であるはずだ。グリーン・ツーリズムの参加者は遠方から来ており、参加前日に旅館や民宿に泊まったり、活動終了後に温泉に入ったりしていくことによって町の観光の発展に寄与している。

6. 実際に事業に参加して

私は今年度の活動計画にも含まれていた、2012年4月29日における地区の伝統的なまつりでの訪問調査においてのことについて触れておきたい。夫婦や家族で訪れている姿があった。会場にはグリーン・ツーリズムの参加者専用の休憩テントが設けられており、参加者同士、参加者と地域の方の団らんしている姿があった。中でも小学生くらいのお子さんを連れてくる家族に話しかける地区のおばあちゃん達の姿が印象的だった。「おっきくなったね」など、まるで自分の孫のように話しかけており、親睦の深さがうかがえる光景だった。これらのことは、日ごろ（実施計画行事において）地域の方が参加者との交流を密に行っているからだ⁶と考える。

⁵ 2012年7月におけるA町グリーン・ツーリズム担当者への質問調査より

⁶ 2012年4月における年間行事への訪問調査より

7. 今後の展望と提案

B 地区としては、今後もこの地域に関わってくれる人がいればそれでいいという考えであった。それは地域住民の楽しみであるから、続けていくことが重要であると考えているからである。しかし問題点に挙げたように、高齢化の影響で存続は次第に厳しい状況に陥っていきと考える。実際に協力について消極的な地域住民の声も出てきていると言う。

今後、参加者が宿泊でき、少しでも収入を得られるような取り組みとして、農家民宿や地区に宿泊施設などの設備を整えることを考えているようだ。現在は、宿泊を希望するオーナーには、町内外の宿泊施設を斡旋しているが、地区での滞在型のグリーン・ツーリズムの強化につなげていきたいとしている⁷。しかしそれも問題に挙げた、働き手は女性であり負担が大きい。だから、男女で意見が分かれる部分である。また、この地域の専門家は地元民であると考えられるから、事業計画には地元の人の意見をより取り入れるべきだと考える。したがって、B 地区内さらには、B 地区・A 町・大学教授の三者を集めた話し合いが必要である。グリーン・ツーリズムの参加者が求めていることよりも、B 地区での本来の生活を味わってもらえるような、継続可能な事業計画になることがこれからの課題であると私自身考えている。

さらに私は、今後のグリーン・ツーリズムの参加者が活動のフィールドにするだけでなく、生活のフィールドとすることがあっても良いと考えている。将来 B 地区に移住してくれる人がまた、グリーン・ツーリズム事業に携わるなど存続の問題についても解消できる部分がある。また、現在は、若干高齢の参加者が多いが新たに若い参加者が農業体験として訪れ、たくさんの方に知ってもらえたらと考える。そのためには、新たにグリーン・ツーリズムの実施についての方法をより考察していかなければならないと思う。私はこれをより長期的な地域活性化につながると考える。

⁷ 東北農政局（2012年7月現在）

http://www.maff.go.jp/tohoku/stinfo/zirei/23gt/09/23hu1002_01.html